
ジジババとのひめ

真実らしさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジジババとのひめ

【コード】

N1296C

【作者名】

真実らしさ

【あらすじ】

家族を自分らしく紹介したいと思います

始まり

親父が死んだ

死因は骨髄性白血病

当日まで知らなかった 教えてもらえてなかった

冗談で看護師さんに『親父の病気ってなんですか？』と聞いてみた
『お母さんの方には説明はしていると思います』

なんかの記念日に母親と韓国旅行に行く前に検査をしたら即入院と
なった

僕には糖尿病の検査に引っかかって少しの間入院するからと母親に
言われた

そう伝えられた19歳の僕にはなんの感情もなかった
むしろ楽だった

ギコチのない父親との会話

ここ何年か目を合わせた記憶がない

息子に気を使っている親父が苦手だった

僕が中学の頃 不良というわけではないが家の中では浮いていた存
在だった自分に親父は一線を引いていた

僕が中学2年のある日の夜10時ぐらいに大好きな女の子と電話で
話していた

親父は僕の部屋に入ってくるなり

『あと20分で終われ』

当時は携帯ではなく家に電話が何個かあり一つ使うと他の電話は使
用できない状態

苛立ちを隠しながらもその女の子との会話に夢中になりそれでも2
0分で切らないとうるさい親父がまた部屋に入ってくる

それが20分も経たないうちに親父が入ってきた

『いつまで話してんだ』

親父は酔っていた

怒鳴り散らす声を受話器の向こう側まで届き

『大丈夫？』

と心配そうな彼女の声

『全然大丈夫だから ゴメンな』

と電話を切った

イライラしながらも部屋から出て行った親父はすでに寝ていたらしく僕の怒りの矛先は母親に向けられていた

一言 言いたかっただけなんだ

『まだ20分はたつてなかった』と

親父がまだ茶の間にいると感じドアを開け母親しかいないのを確認してから

『親父は？』

『呼んで来いよ』

すると母親は冷静に

『お父さんはもう寝たよ』

親父が寝ているのは僕の隣の部屋だった

寝ていたところに僕の電話での話し声がうるさかったのか
ただたんに今まで僕になんも言えなかったのが爆発したのかはわからない

でもそのときの親父の行動に僕はびっくりしていた

気の小さい人かと思っていただけからで いつからか会話はまったく無くなっていたから

それでも自分は悪くない あいつが間違っている

の気持ちで止まらない僕は母親に

『俺外にいるから親父を呼んで来い』

と伝え家の駐車場へと出た

なぜ外に呼び出したかは覚えていない

しばらくすると親父が寝巻きのまま出てきた

酔っていた親父はいつもの気の小さいアイツとは違いいやに威勢がよかった

『あやまれよ』

心の中では受話器の向こうの彼女について思いながら親父にその言葉をぶつけていた

親父は眼鏡をかけているのだがその眼鏡を外し垣根のほうに投げつけ

『親に対する言葉か』

と僕の顔をおもいきり殴りつけた

キれる という言葉は最近ではよく耳にするがどれもキれている状態や話ではないのがほとんど

僕は生まれて初めてキれた

というか殴られた瞬間から記憶がない

駐車場の明かりが点き

『なにしてんのよ』

の母親の声で我に返った

真っ暗な駐車場からの物音からただ事じゃないと思い母親が駆けつけたのだ

親父に馬乗りになった僕の服には返り血がびっしりとついてた

僕の両コブシは血が固まっているのとシビレてるのとで感覚が無い

なんだこれ？しか頭ん中には思いつかなかった

親父はまぶたをばっくり切り後頭部はコンクリートの地面に叩きつけられたのか血でわけわからなくなっている

ドン ドン ドン ドン ドン ドン ドン

僕の鼓動が次第に高まり抑えられない気持ちになっていた

母親は僕をはじき飛ばし

『この人殺したらあんたを殺すからね』

と泣きながら親父を抱きかかえた

なにしてんだ俺？

自分の父親になにしてんだ俺？

ガンガン入ってくるいろんな感情

小さい頃よく海に連れて行ってくれた親父

一緒になってサッカーをしてくれていた親父

親父は はあはあと息遣いも荒く立ち上がるのもやっとの状態で

『お前強いなあ』

僕はわけわからないまま親父を抱え家の中へ親父を運んだ

とりあえず救急車って思いながら

母親が救急車を呼ぼうとしたら親父は

『原因聞かれて息子にやられましたなんて言えない』

『こいつが警察に連れてかれちゃうから呼ぶな』

と言って母親を止めた

とりあえずの応急処置で母親が包帯やらタオルやらでいろいろやっている

それをただただ見ていることしかできなかった

親父はその後約1ヶ月仕事を休むこととなった

その夜は興奮して眠れなかったのを覚えている

翌朝 学校へ行く時間になり親父が寝ているのをチラッとだけ確認し外へ出た

学校へは毎朝友達を迎えに着てから一緒に行くのだが駐車場へ出るとおばあちゃんが駐車場にある昨夜の血溜りをデッキブラシで流していた

おばあちゃんは

『友達をおどろかせちゃうから』

と言いゴシゴシとコンクリートをこすっていた

何も言えなかった 何も・・・

『おばあちゃんゴメンなさい』

『あなたの孫の僕はあなたの息子を殺しかけました』

その後もおばあちゃんの僕に対する態度は今までと変わらずずっと優しいおばあちゃんだった

・・・続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1296c/>

ジジババとのひめ

2010年10月8日14時17分発行